33 前提 南方は根木明（まんどえ なんぽうはねんみょう）

「まんどえ」と言い慣らしたこの道は、周囲より少し高い、いかにもどっしりした道だった。とんぼとりにかけっこに子どもたちには遊びの場だったし、大人たちには大切な農道であった。幹線でないこうした道に、その時その時の生活が展開され、いろいろな情感が染み込むにちがいない。そんな期待を込めて標識をたてることにした。この道の南は見渡す限り水田で根木明とよばれ、湧水や溜池が田をうるおし、夜ぼりなど、絶好の雑魚とり場だった。

34 樋の口（といのくち）

昔は、現在の馬込川が天竜川本流であり、河口付近の白羽湊や田尻湊からこの辺りまで舟で荷を運んだ。主に、肥料にするための「まこも」が積荷だったという。法枝の入口ということからついた名前だが、北と南の境という生活意識もあったようだ。

35 サザンカ通り（さざんかどおり）

「花のない時期に花を楽しんでもらおう」とする修景施設と浜松まつり・凧揚げ会場への観光誘導道路の2つを目的として、整備された道路にリバティ・ライオンズクラブから寄付されたサザンカを道路沿いに植え、通行する人々の目を楽しませている。
地域でもこの通りを大切に育てようと「サザンカ通り」の愛称標識が立てられた。

36 薬師様（やくしさま）

慶安4年（1651年）前浜で地引網に木の仏様がかかり、調べてもらうと尊い薬師如来の像とわかった。そして、小沢渡の東のお寺に堂を建て、薬師様を祭った。薬師様は病気を治す仏様として広く信仰されていたが、特に小沢渡の薬師様は目の病気を治すと尊ばれてきた。戦前は薬師様の縁日があり、参道にはアイスカクテルやカルメ焼きを売る店も並び、大変な賑わいで、子どもたちの大きな楽しみの一つだった。

37 音羽の松（おとわのまつ）

大東院に住んでいた「音羽のばあさん」が保元3年（1158年）、鶴がくわえてきた小松を植えたことが始まりとされている。小沢渡町六所神社の入口、県道沿いに大正時代に建てられた碑があるが、これは道路の向かい側、音羽さん方にあった音羽の松を伝えているものである。ざざんざの松、小沢渡の松ともいわれ、遠州灘を航行する帆船が目標としていた。また、永享4年（1432年）駿河に下向された足利義教将軍が途中、この松をめでて、松風の音はざざんざ・・・と歌われている。

38 たかぶた山（たかぶたやま）

新津地区はほとんど起伏のない平坦な土地である。かつては、たかぶた山はこの地域で一番高い所であり、その頂上は3m程もあったという。たかぶた山という名前の由来ははっきりしない。終戦のころは、本土防衛のため地下陣地がつくられ、おおげさに言えば地下要塞であった。それも使われることもなく終戦を迎え、今は、人家が達ち並んでいる。

39 日の本稲荷権左屋敷（ひのもといなり ごんざやしき）

昭和の初めころまで、小沢渡新田と篠原町の境の一角を権左屋敷といったそうである。そこには、遠く平安時代に貴人が住んでいたという伝説もある。その近くにはお不動様もあり、火渡り式がおこなわれたと聞いている。

40 八幡山（はちまんやま）

小沢渡町六所神社のすぐ北に、八幡山と呼ばれた林があった。八幡山には、延喜式神名帳にある敷知郡六座の中の許部（こべ）神社があったと考えられ、それが浜松市八幡町に移り、八幡宮になったとの言い伝えがある。このことを裏付ける行事として、昭和30年ころまでは小沢渡町の人々が八幡宮のお祭りに参加し、祭装束で神輿をかついだものである。

新津地区八か町の由来

新橋町（にっぱしちょう）

現在は、全面的に埋め立てられて、その面影もないが、昔は可美地区との間に東西に長い沼があった。いつのころからか、この沼地の最もくびれたところに新しい橋が架けられ、その時に里人が名付けた「新橋」が地名の由来といわれている。なお、鎌倉時代の資料の中に、すでに「新橋郷」の名がみえることから、かなり古い時代から、この地名が使われていたと思われる。

小沢渡町（こざわたりちょう）

昔、この町の北側には池や小さな沢が多く東海道へ出たりする場合には、その小さな沢を渡らなければならないところから、小沢渡という地名が生まれたという。

米津町（よねづちょう）

米津の「津」は湊（みなと）・船だまりと考えられ、地元の人は、”昔、ここから米が海上輸送されたので、米津と呼ぶようになった”と話している。また、”米（よね）とは砂と同じ意味で、砂丘にかこまれた湊であった”とする説もある。